取り入れながら、ホテル客室としてまとめられている。壁面の一部にはライト館の象徴的な素材だった大谷石が、家具にはライト館の窓のモティーフを表したステンドグラスを用い、絨毯も当時のデザインを引用するという徹底ぶりだ。

ら新シェフ、ティエリー・ヴォワザン氏を迎えてリニューアルオープンする。海外高級ホテルの東京進出を控え、ホテルの「二〇〇七年問題」とも言われるなか、老舗ホテルの、威信をかけたリニューアルに注目したい。●

槽に囲まれながら食事を楽しめるように考えられているのだ。

一大レジャーランドと表現しても過言ではない「遊べるシティホテル」の、最新型を知ることができるだろう。●

本

［書評同人］
青山南
猪口邦子
鹿島茂
川本三郎
黒岩徹
五味文彦
松岡和子
結城信孝

国際経済の理解をアップデートしよう。

猪口邦子・文
上智大学教授、国際政治学

通貨の興亡

円、ドル、ユーロ、人民元の行方

黒田東彦著／中央公論新社／一八九〇円

欧州共通通貨が構想されてから三十年後の一九九九年、ユーロが導入され、二〇〇一年にはユーロ紙幣とコインが発行されて無事に流通するようになっている。一九八五年のドル安誘導のプラザ合意以来、日本は円高時代へと入り、ひところは円ドル通貨体制と言われるほどの力量が期待を込めて語られたが、円の国際化は規制緩和の遅れから進まず、円建て貿易は日本の輸出でさえ三〇パーセント台でしかない。今日では米ドルの圧倒的中心性とユーロの順調な伸びが印象的であり、資本市場におけるユーロのシェアは急速に上がっている。円の対ドルレートの強含みはユーロの強みにカバーされているからであり、対ユーロでは円の弱体化がみられる。

アジアでは、高度成長する中国のドル・ペッグ人民元が大幅な過小評価で対米輸出が急増し、米中貿易摩擦がある。かつての日米経済関係を思わせ、米国が保護主義に傾くのを防ぎ、またドルの急落を防ぐ必要があるが、ドル建て外貨準備を伸ばす中国はドル暴落阻止に国益を見出し、バンク・オブ・チャイナが今や米国債を大量に買い付けてドルレートを支える時代となった。

9・11同時多発テロ以来、イラク戦争や北朝鮮問題など安全保障イッシューに熱中する間に、ふと気づくと世界の通貨・金融環境は激変してしまった。通貨関係の最先端を過去との関連でわかりやすく説明してくれる本が必要と感じたら、この本が便利。

筆者は財務官として激変する国際通貨外交を生き、アジア開発銀行総裁としてマニラに着任したばかり。アジアでの円の力量を立て直し、日本が開発問題や経済関係の主導権をとっていくためには、日本の市民社会の国際経済の理解をアップデートしておく必要があると感じてか、海外赴任前に書き置きしていってくれた。

現代は歴史の果てにあり、分野の履歴を知ることは常に有益である。本書は、たとえば十七世紀、二十三歳で万有引力を発見したアイザック・ニュートンが、晩年は造幣局長として金貨の対銀交換比率を引き上げて金本位制の時代の基本を築いていく話から、第一次世界大戦によってついに国際通貨ポンドが凋落するダイナミックスを描く。また二十世紀初頭には強力な米ドルを軸に経済大国化した米国も、十九世紀南北戦争のころは、自国通貨発行権を独占する中央銀行を確立できずに、千六百以上の銀行が発行する七千種類の不換紙幣が流通する大混乱状態にあったなど、政策次第で、比較的短い歴史的時間のなかで通貨勢力の盛衰が見られることを明らかにしていく。その教訓から、円の国際力を伸ばし、東アジア域内金融協力を加速化させ、長期的にはアジア共通通貨への道も視野にいれるダイナミックな経済外交が必要であると説き、流行のFTA（Free Trade Agreement＝自由貿易協定）を超えるEPA（Economic Partnership Agreement＝経済連携協定）を広げて金融協力を隠れた主軸に位置づけることを主張する。元気のでる日本思いの本である。●